

クリーンエネルギーに対する地域住民の意識変容の過程 - 岩手県葛巻町における地区自治会長へのインタビュー分析から -

櫻 幸恵

The process of changing local residents' awareness of clean energy : Analysis based on an interview with the president of the residents' association in Kuzumaki Town, Iwate Prefecture

SAKURA Yukie

岩手県葛巻町は、「ミルクとワインとクリーンエネルギーの町」を標榜し、過疎地域における大規模地域開発の成功事例として全国的に知られた町である。町長の強力なリーダーシップは成功要因として広く知られている。本稿では、地区の自治会長へのインタビューを通して一般住民の意識変容の過程がどう進んだかについて検討を試みた。特に労働によって媒介されない風力や太陽光などのクリーンエネルギー開発に関しての意味理解や意識変容の過程について社会教育的視座から分析を行った。その結果、住民は、日常または非日常という異なる場でクリーンエネルギーを通して、省察的学習の過程を踏んでおり、クリーンエネルギー開発はコミュニティ・エンパワメントを生む学習装置としても機能していることが示唆された。

キーワード：クリーンエネルギー、住民意識、自治会、省察的学習

The town of Kuzumaki in Iwate Prefecture, which promotes itself as being "The Village of Milk and Wine and Clean Energy", is a nationally known example of successful large-scale regional development in a depopulated area. The strong leadership of the town mayor is widely known as a success factor. This paper examines how the process of changing the awareness of the general population progressed through interviews with the president of the residents' association. Analysis was done from a social education perspective on the process of understanding the meaning and changing awareness toward the development of clean energy such as unmediated wind and solar power. The results suggest that residents are engaged in a process of reflective learning on clean energy development that differs in usual and unexpected settings, and that clean energy development also functions as a learning device to generate community empowerment.

Keywords: Clean energy, community awareness, district community associations, reflective learning

1. はじめに

岩手県葛巻町は「ミルクとワインとクリーンエネルギーの町」として、他に先駆けて「食料・環境・エネルギー」の課題に取り組み、過疎地域における地域活性化の成功事例として全国的に注目されている。町内に散在する牧場・農場を活用したグリーンツーリズム、山ぶどうを原料とした「くずまきワイン」の生産、風力発電（風車15基）・太陽光発電・バイオマス発電（バイオガス）などの新エネルギー発電で知られ、人口

6,279人（2018.4.1）の町に視察や観光で訪れる来町者は1985年の6万人から、2018年度実績値で523,665人へと激増している（葛巻町,2019）。

かつての葛巻町は高い山々に囲まれ寒冷な気候から、農作物は雑穀栽培が主で、林業や牧畜で細々と暮らす過疎地域であり、「ここは岩手のチベット」と自虐的な言葉が住民から聞かれた時代もあった。しかし、1970年代後半以降、町長のリーダーシップの下で酪農開発、酪農生産物のブランド化やワイン生産開発、新

エネルギー開発を行い、「考えられないほど貧乏な町」が、「考えられないほど大規模な事業」に取り組んだ結果、この半世紀の間に大きな変貌を遂げてきた（高木, 2018）。その経緯は、すでに多くの文献に明らかである（鈴木, 2001、前田, 2006、亀地, 2006, 2011、関, 2009、島村, 2009、高木, 2018等）。その推進の中心となっているのが 葛巻町畜産開発公社（くずまき高原牧場）、グリーンテージくずまき、葛巻高原食品加工株式会社（岩手くずまきワイン）、エコワールド葛巻風力発電株式会社の第三セクター 4社である。このほか森林組合も積極的に活動をしている。1990年代以降の新エネルギー開発では、風力発電や太陽光発電、バイオマスエネルギーの利活用を積極的に推進し、町民や事業者、行政が一体となり省エネルギーに取り組むことにより、「エネルギー自給率100%」のまちづくりを目指している。

町長をはじめとする町のリーダーたちが起こしたソーシャル・プロジェクトは公共空間に大きな変化をもたらした。先行研究（八巻・茅野・藤崎・林 他, 2014）によれば、こうした葛巻町の成功は人的ネットワークによるところが大きく特に町長は媒介中心性が最も高いアクターであり、町長のリーダーシップと町長を中心としたリーダー層によるネットワークが機能していることが大きい。葛巻町の地域づくりを進める関係者には町外在住の者も多く資源の入手に機能している。また、河藤（2010）によれば第3セクターが地域産業政策に積極的な役割を果たしていることも成功要因として挙げられる。

ただ、葛巻町の生活現実に目を向けると、実は現在も町民一人当たりの分配所得は岩手県内のワースト1位であり、生活保護率も岩手県内では岩泉町に次ぐ高さである（岩手県, 2019）。しかし、それでもなお、上記のとおり50万人を超える交流人口を誇り、全国でも著名な自治体の一つとなった葛巻町にはかつての自虐的な暗さは感じられない。それどころか、町役場の職員の言葉によれば、現在では葛巻町民であること、葛巻町出身者であることを誇りに思い、岩手出身ではなく「葛巻出身です」と自己紹介する県外居住者も多いという。そうした町民の肯定的感情を涵養し、コミュニティ・エンパワメントを促進してきた中心は、上記の先行文献や先行研究によれば町長や行政、第3セクター、森林組合などの地域のリーダー層である。

しかしながら、これまで自治会単位での意識変容の

過程については詳しい調査はなされていない。そのため、本稿では新エネルギー（クリーンエネルギー）の導入後に焦点を絞り、葛巻町内の自治会など地区単位では、住民にどのような意識変容の過程があったのか、社会教育的な視点から省察的学習の枠組みに沿って住民の意識変容の過程について分析を行ってみたい。

II. 方法

1. 調査の対象と方法

岩手県葛巻町の6名の関係者（自治会長2名、役場職員1名、公舎職員2名、中学校長1名）に対し2017年度～2019年度にかけて、葛巻町の地域開発に関するインタビュー調査を、各1時間程度をかけて実施した。

葛巻町では町の避難所指定の地区コミュニティセンター等25か所すべてに太陽光設備を導入しているが、今回はそのうち早期に導入をしたX地区自治会の自治会長1名（Aさん、50代、男性）に対して2019年1月に行ったインタビュー調査に基づき、クリーンエネルギーに関する地域住民の意識変容の過程について、省察的学習の視座から分析を試みる。

2. 倫理的配慮

インタビュー調査に際しては、本学の研究倫理規定に準拠し、(1)被調査者の回答の拒否・中止等の自由、(2)守秘義務に則ったデータの慎重な取り扱い、(3)分析結果の公表時の匿名性の担保、(4)分析後の元データの破棄などを書面にて説明し、了解を得た。

3. 分析手法

分析は、SCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて行う。SCATは、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに(1)データの中の注目すべき語句、(2)それを言いかえるためのテキスト外の語句、(3)それを説明するようなテキスト外の概念、(4)そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順にコードを考え付していく4段階のコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手段である。SCATを用いる理由は、比較的小規模のデータの分析に適用可能であることと、明示的で段階的な分析手続きを有することから分析過程が可視化でき、妥当性確認が容易であることによる（大谷, 2019）。

Ⅲ. 結果

X地区自治会の自治会長Aさんに対するインタビュー調査結果のSCATによるマトリクスは表1の通りである。インタビュー調査のうち、研究テーマに関する回答部分についてセグメント化したデータに基づき、コーディングを行って構成概念を抽出した。以下が構成概念に基づくストーリー・ラインと理論記述である。

1. ストーリー・ライン

※ 構成概念は [] で記載してある。

はじめに聴き手から、〔住民の意識変容過程の振り返りの促し〕を受けた自治会長のA氏は、自治会での〔地区へのクリーンエネルギー導入のメルクマールとしての立場〕の決定は、当初は〔対価への漠然とした期待〕に基づく〔住民の受動的な合意〕に過ぎなかったと語った。

しかし、聴き手からの〔意識変容の過程の確認〕を受けてA氏は、地区住民が〔太陽光の生活手段としての直接的な使用価値〕や〔迂回的な生産手段としての使用価値〕に徐々に気づき、〔営利を動機としたクリーンエネルギーの有用性の集団的認識〕を生み、〔存在基盤の再構築としての意味理解〕をしたと述懐した。

また、個人宅での太陽光導入は〔既存の意味パースペクティブとの照合〕による〔新たな価値や意味の個人的判断〕による〔住民個人の新しい知識・経験の省察的实践〕であった。

一方、〔葛巻町のクリーンエネルギーシステム〕を〔生成装置としての風車による可視化〕で実感した地域住民は、〔日常空間の質的变化〕を認知し、〔クリーンエネルギーによる地域営利の意味理解〕をした。それは〔地域資源のリフレイン認識による触発〕と〔新たな資源活用への驚きと発見〕でもあった。加えて〔風車の観光資源としての意味付け〕は〔価値の創出への誇り〕を生んだ。

また、〔葛巻町のクリーンエネルギーシステム〕の〔「象徴記号」としての巨大風車への畏敬〕は〔労働によって媒介されないエネルギー〕を实体化させ、〔ミルクやワインの商品価値とは異なる価値〕として〔開発のストーリー全体を象徴する惹句(タグライン)〕として理解され、〔地域開発への肯定

的評価〕と〔クリーンエネルギーによるコミュニティ・エンパワメント〕を強固にした。

2. 理論記述

- ① 自治会の〔地区へのクリーンエネルギー導入のメルクマールとしての立場〕は〔対価への漠然とした期待〕による〔住民の受動的な合意〕からはじまる。
- ② しかし、〔太陽光の生活手段としての直接的な使用価値〕や自治会へ収入をもたらす〔迂回的な生産手段としての使用価値〕に地区住民が気づいた段階で〔営利を動機としたクリーンエネルギーの有用性の集団的認識〕を生じ、〔存在基盤の再構築としての意味理解〕がなされる。
- ③ また、〔既存の意味パースペクティブとの照合〕による〔新たな価値や意味の個人的判断〕による〔住民個人の新しい知識・経験の省察的实践〕として個人宅への太陽光導入が起こる。
- ④ 一方〔生成装置としての風車による可視化〕は〔葛巻町のクリーンエネルギーシステム〕の存在を実感させ、〔日常空間の質的变化〕や〔クリーンエネルギーによる地域営利の意味理解〕を住民に促す。それは〔地域資源のリフレイン認識による触発〕や〔新たな資源活用への驚きと発見〕としても知覚され、加えて〔風車の観光資源としての意味付け〕は〔価値の創出への誇り〕を生む。
- ⑤ つまり〔「象徴記号」としての巨大風車への畏敬〕は〔ミルクやワインの商品価値とは異なる価値〕、〔労働によって媒介されないエネルギー〕がもたらす使用価値に対する内発的理解を引き出す。
- ⑥ 地区の太陽光発電や巨大風車は〔開発のストーリー全体を象徴する惹句(タグライン)〕となり、〔地域開発への肯定的評価〕と〔クリーンエネルギーによるコミュニティ・エンパワメント〕を強固にする装置として理解される。

Ⅳ. 考察

上記の分析結果からは、葛巻の自治会における一般町民のクリーンエネルギーに対する意識の変容過程は、地区センターに設置された太陽光発電と、高地に立てられた巨大風車による風力発電では、いずれも労働を媒介としない自然エネルギーではあるが、住民の理解の仕方が異なっていることに気づくことが出来る。

太陽光発電は、地区の集会所だけでなく町内の公共施設や学校などあちこちに設置され可視化されるため、日常生活の動線上で繰り返し住民によって知覚され、その使用価値も身体的連続性を持って住民に理解される。また、売電収入として直接的な利益を生むために、収入を地区活動に活かせるなど、営利を動機として地域住民がその有用性を積極的に認識していくことが可能となる。そのため、自治会長のAさんによれば、「地区では特に自然エネルギーの学習会はしたことがない」状況でも、住民はこれまでのエネルギーに対する価値観を自ずと問い直し、肯定的な理解につながりやすい。仮に地域に強いリーダーシップが無くても、クリーンエネルギーの有用性は、日常的に住民の間へじわじわと浸透していく。そのことは、個人宅への太陽光導入の過程からも推察できる。個人宅への太陽光導入は、Aさんの語りによれば、はじめに、住民は太陽光発電に触れて、または自ら集めた情報によって、既存の意味パースペクティブを問い直し個人的な判断を行う。そうした判断ができる住民は、クリーンエネルギーという新しい価値を受け入れ、省察的实践として自分の家に太陽光を導入する過程を踏んでいるのだと理解できる。各家庭の金銭的な事情に違いはあったにせよ、そうした省察的实践ができる町民から新エネルギーに対する学びと意識変容は始まり、徐々に地区内で伝播していくのではないかと考えられる。

一方、町内の高原（高地）に設置された巨大な風力発電用の風車は、違う過程を踏んで地区の住民にクリーンエネルギーに対する理解を促す。高原の景観に突如現れる巨大な建造物は、日常の延長線上というよりは、クリーンエネルギーシステムのシンボリックな存在として、住民には知覚される。太陽光発電のような直接的な利益はもたらさないが、その姿に接すると「象徴記号」としての巨大風車への畏敬の念が引き起こされる。だからこそ、住民は町外から人が町に来た時には、わざわざそこまで案内し、一緒に見にいって誇らしい気持ちを持つ。そうした観光資源として活用している。その巨大さゆえに、自然エネルギーの持つパワーと継続性を省察的に学習し、ミルクやワインの商品価値とは異なる価値と、クリーンエネルギーシステムそのものの大きさを体感するのだと考えられる。

このように、太陽光発電と風車による風力発電によって住民は、日常または非日常という異なる場における省察的学習の過程を踏むのである。つまり、両者

とも地域住民に対して、地域住民が持っている既存の意味パースペクティブを問い直す省察的学習の機会を意図せずして提供している。そして、どちらの装置も「エネルギー開発のストーリー全体を象徴する惹句(タグライン)」として機能していることによって、「地域住民による地域開発への肯定的評価」と「クリーンエネルギーによるコミュニティ・エンパワメント」を強固にする学習装置としても理解されるのである。

ここには、葛巻町の地域開発そのものが持つ地域住民に対する社会教育的価値が内包されている。これは、先行研究が明らかにした強固な人的ネットワークとは異なる次元での、葛巻町の成功を支える一つの要因と考えることができるだろう。

付記

本研究は、文部科学省科学研究費 基盤研究 (B) 平成28年度－平成32年度「ポスト福祉社会の地域づくりにおける社会教育的アプローチに関する理論的・実証的研究」(研究代表者：東北大学高橋満)の研究分担者としての研究成果の一部である。

謝辞

本研究を実施するにあたり、調査にご協力いただいた葛巻町役場の関係者の皆様、インタビュー調査を快く引き受けてくださった皆様に対し、記して感謝の意を表します。

参考文献

- 小池源吾・志々田まなみ 2004 成人の学習と意識変容
 広島大学大学院教育学研究科紀要 第53号
 高橋満 2003 国家地域づくりと社会教育『地域づくりと社会教育的価値の創造』p.195-205 東洋館出版社

引用文献

- 岩手県 2019 生活保護主要統計データ
 亀地宏 2006 株式会社「岩手県葛巻町」の挑戦—ミルクとワインとクリーンエネルギーの理想郷 加藤文明社
 亀地宏 2011 夢に向かって「岩手県葛巻町」の挑戦—ミルクとワインとクリーンエネルギーの理想郷— 加藤文明社
 河藤佳彦 2010 酪農地域における経済活性化に関する

考察—岩手県岩手郡葛巻町の取組み— 地域政策研究第12巻4号 p77-p95

葛巻町 2019 「葛巻町 まち・ひと・しごと創生総合戦略」効果検証（令和元年度末）

前田典秀 2006 風をつかんだ町—クリーンエネルギー・自然の財宝を掘りあてた岩手県葛巻町の奇跡— 風雲舎

宮崎隆志 2019 暮らしの思想の生成論理—地域社会教育の学習論—『地域づくりと社会教育的価値の創造』p.195-205 東洋館出版社

大谷尚 2019 質的研究の考え方—研究方法論からSCATによる分析まで 名古屋大学出版会 p278-p300

関満博 2009 地域産業の「現場」に行く—誇りと希望と勇気の30話 新評論

鳥村葉津 2009 スローな未来へ—「小さな町づくり」が暮らしを変える 小学館

鈴木重男 2001 ワインとミルクで地域おこし—岩手県葛巻町の挑戦— 創森社

高木栄 2018 二人の男 幻冬舎

八巻一成、茅野恒秀、藤崎浩幸、林雅秀 他 2014 過疎地域の地域づくりを支える人的ネットワーク—岩手県葛巻町の事例— 日経紙p221-228

【参考：表1】A氏のインタビュー結果のマトリクス

発言者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の置いかえ	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）
聞き手	自治会単位で住民の方たちが具体的にどうふうで意識が変わってきたのかがちょっと見えなかったの、自治会の会長さん、副会長さんからお伺いできたらなと思って来たんです。それで、ご紹介いただいて、グリーンエネルギーを使って自治会運営が自主的に行われていることということでご紹介いただいたところなんですけれども。	住民/意識/グリーンエネルギー/自治会運営/自主的	グリーンエネルギーによる自主的自治会運営/住民の意識変容	住民の意識変容の過程	住民の意識変容過程の振り返りの促進
自治会Aさん	太陽光については、こちらから希望したという前提ではないんですけども、みんなでセンターにつけてもらえるということでしたけれども、売電したことによっての収入も、いくら収入があるかというのわからない、手探りの状態だったので。	太陽光/希望したという前提ではない/みんなでセンターにつけて/売電/収入/手探り	集会所への太陽光設置の受動的立場/売電収入への漠然とした期待	地区へのグリーンエネルギー導入のメルクマールとしての依頼	地区へのグリーンエネルギー導入のメルクマールの立場/住民の受動的な合意/対価の漠然とした期待
聞き手	最初ですね。	最初	開始	過程の開始	意識変容の過程の確認
A	ええ。ある程度その収入が見通せることによって、トイレを水洗化にできたというのもあるんですけど、太陽光のおかげできれいなトイレ、水洗化もできたということが町民にとっては一番、売電した収入が今まではまあお金がなくて、センターをやるのもうやかくセンター運営という管理をしていたのを、売電することによってある程度余裕ができたという形になって、それが一番目に見えて、毎年20万ずつとか1年間に売電して、それがその分使わなくて貯まっていって、ある程度、金銭的に見ると、みんながこんなに太陽光の売電したのが収入になっているんだなというのが一番、総会の資料を見てみんなも感じていることだと思います。	太陽光のおかげできれいなトイレ/水洗化/今まではお金がなくて、センターをやるのもうやかくセンター運営という管理をしていたのを、売電することによってある程度余裕ができたという形になって、それが一番目に見えて、毎年20万ずつとか1年間に売電して、それがその分使わなくて貯まっていって、ある程度、金銭的に見ると、みんながこんなに太陽光の売電したのが収入になっているんだなというのが一番、総会の資料を見てみんなも感じていることだと思います。	地域の経済的課題の解決/グリーンエネルギーの有効性の気づき/地区住民への可視化	生活手段としての直接的な使用価値/迂回的な生産手段としての使用価値	太陽光の生活手段としての直接的な使用価値/迂回的な生産手段としての使用価値/営利を動機としたグリーンエネルギーの有効性の新たな集団的認識/存在基盤の再構築としての意味理解
A	それが実際的に自分の家でもある程度小さい太陽光をつけている方もいるんですけども、全戸そういう風につけていないわけじゃない。新しくつける人とか、いろいろ情報もあったりしてつけている人もいます。	自分の家でもある程度小さい太陽光/全戸そういう風につけていないわけじゃない/新しくつける人/いろいろな情報もあったりしてつけている人	住民の個人宅の太陽光導入の差異/新規に多様な情報を根拠につけていく人	新しい知識・経験と既得の意味/パスベクティブとの軋軋/軋軋の有無による導入の可否判断	住民個人の新しい知識・経験の省察的実践/既存の意味/パスベクティブとの照合/新たな価値や意味の個人的判断
A	なかなかそれが全部の風力と太陽光ということと、葛巻がやっている自然エネルギーという大きいエネルギーというよりも、むしろ、今、風車が出来たことによって、「風車エネルギーになるんだな」と、それが変な話、お金になるんだなというような感情も、町民というか地区の中ではできてきている、昔よりは、やっぱりこのグリーンエナジーの前にも太陽光がずっとついていてるんですけども。	葛巻がやっている自然エネルギーという大きいエネルギー/風車/風車エネルギー/お金になるんだなという感情/グリーンエナジーにも太陽光がずっとついていてる	葛巻の自然エネルギーシステム/風車によるエネルギー生成/過程の可視化/経済的価値の住民認識/太陽光の継続性	自然環境の新たな意味付け/省察的理解/経済的有用性/エネルギー供給の継続性	葛巻のグリーンエネルギーシステム/生成装置としての風車による可視化/グリーンエネルギーによる地域営利の意味理解/日常空間の質的变化
聞き手	はい、ついてますよね。				
A	「これが何？」というのとか、そういう興味も、あちこちにセンターについていたり、各地区についているので、興味がおそろく早く出て、「こういう資源というか、こういうところでもこういうことができるんだな」というような感情は、やっぱり昔とは違って自然エネルギーに関しては、関心は本音の関心と言えそうになるかもしれないけれども。	こういうところでもこういうことができるんだなという感情/本音の関心と言えそうになる	新たな地域資源の気づき/新たな使用価値への関心	新エネルギー理念ではない、地域資源のリアリズムによる驚き/事物の使用の仕方からの新たな発見	地域資源のリアリズム認識による発見/新たな資源活用への驚きと発見
聞き手	少しずつ身近にというか。				
A	あそここの風車についてはもう観光になってきているので、もし自分の家族、東京に行っている家族が帰ってきたときにどこかに行くかと思ったら、「風車を見に行こう」とか、もう観光スポットでいいんですけど、これが回って電気を売電しているという、それを見に行こうという1つの観光にもなっているわけですから、それがある程度、都会から来た人には1つの自慢にもなるし。	風車/観光スポット/回って電気を売電/それを見に行こうという1つの観光/1つの自慢	風車の異なる価値の見出し/観光資源としての意味の付与/誇り	景観のリアリズム/地域資源の価値の見出し/新たな創出への誇り	風車の観光資源としての意味付け/価値の創出への誇り
聞き手	そうですね。				
A	何もないところ、30メートルある風車が、30メートルある風車が建っているんだというのを見て、どこかです。「おお、すごいね」というような、そういう風車にしてもそういう身近で見られるということがやっぱり一番肌で感じられる何かは町民の中にも、常に「ミルクとワインとグリーンエネルギーの町」というキャッチフレーズでやっているの、ミルクとワインというのはみんなわかってきている。	何もないところ/30メートルある風車/すこい/身近で見られる何か/常に「ミルクとワインとグリーンエネルギーの町」というキャッチフレーズ/みんなわかってきている	開発/巨大な人工物への畏敬/風車を介したエネルギー力の知覚/グリーンエネルギーの分かりにくさ	労働によって媒介されないエネルギーの捉えにくさ/巨大な建造物を介したエネルギーの知覚/ストーリー全体を象徴する語句（タグライン）	「象徴記号」としての巨大風車への畏敬/ミルクやワインの商品価値とは異なる価値/地域労働によって媒介されないエネルギー/開発のストーリー全体を象徴する語句（タグライン）
聞き手	飲んだり食べたりできるから。				
A	「そうなんだよね、それしかないんだもんね」というのが、新たにグリーンエネルギーというのが加わったことによって、町自体が少しレベルアップしちゃうんですけど、そういう形に、更にもう1つ、ミルクとワインだったからだったけど、グリーンエネルギーが加わってまた少し上に自分の町がパワーアップしたかなという感じはあると思いますけど、そんなエネルギーなんていうのが、ワインもその当時、最初の頃は、「ミルクはわかるけど、ワインは葛巻産は変だよな」という。	グリーンエネルギー/加わって町自体が少しレベルアップ/少し上に自分の町がパワーアップ/最初の頃/変だよな	グリーンエネルギーに対するプロセスのイメージ/地域のレベルアップ/パワーアップ	グリーンエネルギーによる地域開発の省察的評価/住民意識の肯定的変化	グリーンエネルギーによるコミュニティ/エン/ブランド/地域開発への肯定的評価

